［社　会］

思考力を育てる社会科授業の創造

―「ふるさと」に着目し「対話」を核に学びをつむぐ子どもを目指して―

松岡　貴徳*

1　研究の目的

小学校の社会科は，一貫して「民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことを教科の目標として掲げてきた。「公民的資質の基礎」とは，民主的，平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち，自他の人格を互いに尊重し合うこと，社会的義務や責任を果たそうとすること，社会生活の様々な場面で多面的に考えたり，公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。

このことからも，社会科で培うべき中核的な目標が「公民的資質の基礎」であることが分かる。そして，この公民的資質を養うためには，社会的なものの見方や考え方を育てることが必要である。その見方や考え方を支えるのが，社会的な思考力・判断力と言えよう。

では，社会的な思考力・判断力とは何か。社会的な思考力・判断力とは，社会的事象についての知識を単に積み重ねていくのではなく，社会的事象の意味を他と比較したり，因果関係を明らかにしたり，また，それと自分とのかかわりなどについて考えたり，判断したりする能力である。また，このような力は，社会的事象の意味を追求する中で育てられるべきものであろう。つまり，社会的事象の意味を追求していくためには，比較や関連を通して因果関係を明らかにしたり，自分との関わりについて考えたりするなど，多様な追求方法からアプローチすることが大切で，そうした学習過程の中で思考力・判断力が育てられるのである。

このようなとらえのもとに，社会科の授業を創造する時，社会的事象を追求する子どもたちの学びには，本来，様々な学びを関係づけ，学びをつむぎ，創り変えていく構造が内在化している。そして，このような子どもの姿を支えるのは，自分をとりまく対象や他者に対して「対話」するという手だてである。また，その対話は二つの方向性をもち，一つは「学ぶ主体同士の交流の中で，互いの違いをもとに考え合う他者との対話」であり，もう一つは「内なる自分と向き合い，吟味しながら納得の世界を形成していくための自己内対話」である。この他者対話と自己内対話の両者の手だてが相互に関わることにより，子どもの思考過程が質的に高まり，その中で思考力そのものが育まれる。この過程を「学びをつむぐ学習過程」ととらえている。

ところで，今までの歴史学習を振り返ってみると，その時代のできごととその背景を関連づけて，時代の特色をとらえさせることが多かった。しかし，子どもたちには，暗記する教科というイメージが強かったり，生活とかけはなれた内容や与えられた課題であったりすることが多かった。そのため，子どもたちの問題意識が希薄になり，学習意欲が持続しないことが多く見られた。

歴史学習における社会的な思考力や判断力が培われるためには，学びをつむぐ学習過程を通して，社会的事象の意味を追求する中で，自分なりの観点（多様な判断規準）をもって事象と事象を関連づけたり，判断したりすることが大切である。また，自分の考えを友達と関わらせたりする活動を繰り返し行っていかなければならない。さらに，地域の社会生活と関わりの大きい歴史的事象の教材化も大切である。

以上のような考え方に基づき本研究では，歴史学習において，「学びをつむぐ過程」つまり，他者対話や自己内対話の手だてを核として，具体的な歴史上の事実が多い上越（高田）の素材から歴史的見方や考え方を育てる活動を試みる。その在り方を，子どもの思考する姿とその思考の過程や要因に着目して，明らかにすることを目的とする。

＊ 上越市立大町小学校

2　研究の内容・方法

(1)　本単元の構成と位置づけ

①　単元名　高田の城下町と江戸幕府

②　目標　○徳川家が行った政策に関心を持ち，江戸幕府の始まりや大名行列，鎖国などについて調べ，身分制度が確立して武士による政治が安定したことが分かる。

○高田の城下町の歴史調べを通して，江戸幕府の武士による統制された政策が地方にも浸透していたことに気づかせ，江戸幕府の政治の強固さについて自分の考えをもつことができる。

③　単元でめざす学びをつむぐ姿（評価規準を基にした学びの様相）

●江戸幕府の長期政権の理由や背景を，大名統制制度や身分制度，鎖国制度などの資料から見つけて自分なりの考えをもつ。

●高田の城下町の政治や暮らしと江戸幕府の政策とを照らし合わせ，江戸幕府の政治の強固さについて，自分の考えを再確認する。

●大名統制制度や身分制度，鎖国制度の観点から，江戸幕府の政治の強固さについて，自分の考えをとらえ直し，評価する。

(2)　単元展開の構想

①　江戸とふるさと（高田）を比べたり，関係させたりする活動

江戸幕府の政策について考える際，子どもたちにとっては，遠い時代の出来事であったり，大きな枠組みの中での政治の流れであったりするため，自分たちとの隔たりが大きく，とかく自分たちとはかけはなれた別の世界としての遠い感覚を覚えるであろう。そこで，自分たちの故郷高田における江戸時代の様子をつぶさに調べる過程を通し，実感をもって当時の政治の仕組みに迫らせたい。そうすることで，歴史が自分たちの身近に脈々と流れていることを感じたり，歴史的事実への納得の度合いが深まったり，理解する事実が増えたりする「学びをつむぐ姿」が期待できる。また，そのつむいだ力が新しい意欲へつながることも期待できる。

その姿を願い，幕府がどのように大名を統制していったのかを探る活動で，高田の江戸時代の様子についてふれることを学習活動の中に取り入れる。高田の町が幕府の要地として位置づけられていた事実や，その地に徳川家康と親子の絆で結ばれている松平忠輝の入封，お家騒動などを題材に取り上げ，支配する幕府と支配される大名との力関係や，支配する立場の苦悩などに迫る。

また，武士以外の身分の人たちを統制する手段として，作られた身分制度をしっかりと見える形でとらえさせるために，江戸や高田の城下町の絵図を比較して民衆の暮らしを取り上げ，身分による区分けが地方の高田でもしっかりとされていた事実をつかませたい。

②　対話を核とした「調べる→考える→考えを交流する→考えを見つめ直す」思考過程

本単元における学びをつむぐ姿とは，「調べる→考える→考えを交流する→考えを見つめ直す」の学習過程の中で，友達との他者対話を通した自己内対話により，幕藩体制の強化をより主体的に受けとめられる。他者対話により江戸時代の政策が強固になっていった理由を広げ，意見文作りによる自己内対話から成立すると考えると，下のように意味づけることができる。

○調べる（見つけて考えをもつ）……大名統制や鎖国政策，身分制度について，江戸幕府の長期政権にどのような影響があったか，自分なりの考えをもつ。

○考える（考えを広げる）……江戸と地方（高田）の政治や暮らしを比べ，江戸時代の統制の仕組みが地方の高田にも及んでいた実態を，他者の獲得した具体的事実や推論による考えにふれる中で，江戸幕府の政治の強固さについての要因を探る。

○新たな発見や課題をもつ
（考えを見つめ直す）……江戸幕府の政治の強固さについて，自分の考えと他者の考えをもとに対話を通して，江戸時代が260年にわたって続いた理由について，幕府・庶民の立場に立って再度自分の考えをまとめる。

3　実践の概要（対象：第６学年）

(1)　単元計画

学　習　活　動	学びをつむぐ支援（○）と評価（●）
□徳川家光の自信あふれる言葉の意味を想像しよう。 ○家光はどうしてこんな言葉を語れる自信があったのだろうか。 （１時間）	○外様大名の気持ちを吹き出しで表し，それを意見交換するなかで，支配される立場について，自分の考えをもつ。　（積極派ＶＳ消極派の対比による他者対話） ●徳川家光の自信について，自分の予想をしっかりもっているか。
□徳川家光の自信のひみつをさぐろう１ ○家光はなぜ，二百数十の多くの大名や農民をおさえることができたのか。 ○江戸幕府の政策を評価しよう① （１時間）	○大名行列や大名配置図・身分ごとの人口割合グラフ・慶安の御触書などの資料を提示して，江戸幕府の統制の要因をあげられるようにする。　（自己内対話） ○支配する側と支配される側の思いを明確にするために意見交換をしながら進める。 （支配する側ＶＳ支配される側の対比による他者対話） ●江戸幕府の統制政策を見つけ，江戸幕府の政策を評価する際に，自分の考えに生かしているか。
□徳川家光の自信のひみつをさぐろう２ ○家光は，なぜ鎖国政策をとったのか。 ○江戸幕府の政策を評価しよう② （１時間）	○天草四郎の思いや願い，日本に帰って来れなかった少女について意見を交流し合い，制限を受けた人々の思いに迫り，再度江戸幕府の政策について自分の考えをもてるようにする。 （弾圧を受けた人々への共感の幅を広げるための他者対話） ●江戸幕府の統制政策を見つけ，江戸幕府を評価する際，自分の考えに生かしているか。
□高田でも江戸幕府の政策が及んでいたのだろうか。 ○なぜ松平忠輝が高田を治めたのだろう。 ○徳川幕府の政策を評価しよう③ （１時間）	○自分の考えが，どんな政策を裏付けとしているのかを自分自身がはっきりと認識するために，自己判断する機会を設ける。　（自己内対話） ○大名配置図と加賀藩の大名行列行程図を提示して気付いたことを出し合い，高田が重要な地であり，そこに有力な大名を配置したことが明らかになるようにする。　（資料を読み合う中での他者対話） ●なぜ高田が幕府にとって重要な要地であったことをとらえながら，江戸幕府を評価する際，自分の考えを確立しているか。
□高田でも江戸幕府の政策が及んでいたのだろうか。 ○城下町「高田」は，どんな町だったのだろう。 ○徳川幕府の政策を評価しよう④ （１時間）	○班活動で高田の城下町の絵図をみて，気付いたことを相談しながらポストイットに書いていく。 （資料を読み合う中での他者対話） ○分類したものを発表する際，自分たちの班の考えと他の班の考えの共通点や相違点に着目して交流する。 （他者対話） ●江戸幕府の統制政策と，高田の政治や暮らしとの関連を見つけ，江戸幕府を評価する際，自分の考えに生かしているか。
□徳川幕府に意見文を届けよう。 ○自分が下した江戸幕府の評価や，その理由について，巻紙や新聞で表そう。　（１時間）	●江戸幕府に対する自分の評価を，はっきりと伝える意見文を作成しているか。

⑵　指導の実際

①　１時間目

まず，はじめにこれまで学習してきた織田信長と豊臣秀吉が天下を統一していた時代（安土桃山時代）と江戸時代について，30年と260年という時代の違いを画用紙で視覚的に示すと，子どもたちは一様に「江戸時代はなぜこんなに長かったのか」と感想をもらした。そして，その江戸幕府の基礎を築いたのが，３代将軍徳川家光であることを伝え，その徳川家光の「生まれながらの将軍」のエピソードから，

◎家光の言葉を聞いた大名たちは，どんな気持ちをもっただろう

と投げかけた。子どもたちの意見は，「家康がいたから天下を取れたんだ。いい気になるな」や「いつかたおしてやる。今のうちだぞ。」などの怒りの感情からくるとらえと，「相手にするとやばい…」や「家がつぶされないように気を付けよう」などの弱気の感情からくるとらえに分かれた。子どもたちは，それぞれの考えに共感しながら聞いていた。そして，徳川家光はどうしてこんな言葉を語れる自信があったのかについて，次時から調べていこうということを伝えた。歴史に大変興味を示しているＡさんやＢさん，Ｃさんなどは，授業終了後，「大名行列をさせたんだよね。」と，すでにどんな政策が行われていたのかについて，予備知識をもっていたが，ほとんどの児童はどんなことがあったのか見通しはもてていなかった。

②　２・３時間目

本時と次時は，予想通り予備知識をほとんどもっていないことが分かったため，

◎徳川家光の自信のひみつをさぐろう

という課題のもとに，調べ学習を進め，終末に江戸幕府の政治を評価して意見を交流する学習を構成した。２時間目では，大名の統制の仕組みと身分制度の確立について，３時間目では，キリスト教の禁止と鎖国についての内容を網羅しようと考えた。短時間でたくさんの基礎的な事項をおさえるために，また共通した資料を読み取ることで資料の見方の共有を図るために，資料は子どもの身近にある資料集と教科書に限定した。

第２時・第３時の江戸幕府の評価活動では，資料をもとに自分の考えを確立する思考の姿として，Ｄさん「家光は考えながら行動している人だ」Ｅさん「農民にきびしく農民を苦しめる将軍は，将軍の資格がない」Ｆさん「70点にした理由は，たしかに平和になったけど，同じ人間を差別するのは，私と反対の考え方だったからです。私だったら，踏み絵は踏めない。」Ｇさんは「わたしだったら，外様大名を江戸の近くにおいて，仲をよくしようとしたと思う」などの姿が見られた。しかし，子どもたちの考えには，支配されることへの強い抵抗の気持ちや，支配する方法についてやりすぎではなど，多方面からの追求が多々見られた。

この単元でねらっている姿は，Ｆさんの「でも，人間みな平等だと幕府も大変になると思うので，難しいところなのだと思う」のような基本的な考え方であった。よって，次時において江戸と高田の関係について考える際に，このような政治がふるさと高田にも影響を及ぼしていたのか調べることを通して，それぞれの立場の意見を交流させたうえで，もう一度江戸幕府について考える機会を設定することにした。

③　４時間目

本時では，２・３時間目に学習した江戸幕府の政策と高田を関連させるために，

◎高田でも江戸幕府の政策が及んでいたのか

を課題に，まずは自己判断させた。「及んでいる」が23名，「及んでいない」５名であった。主な理由は，「及んでいる」派は「九州にも外様大名がいたんだから」「高田城がある」「大名行列が通っていたから」であり，「及んでいなかった」派は，「江戸から遠い」「こんな田舎まで見きれない」であった。そこで，高田城の城主一覧表を通して松平忠輝の存在に気付き，家康の６男であったことにみなびっくりしていた。そして，「どうしてそんな人がここ高田を治めたのか」という疑問が自然に浮かび上がってきた。そこで，大名配置図と加賀藩の大名行列の図を比較して意見交換を行った。「大名行列の通り道には，譜代や親藩大名ばかりだ」「前田氏に江戸幕府のことを伝える役だったのでは」などの意見が出されたが，Ｇさんの「高田の近くには何かいいものがあったのではないか」という意見から，Ｈさんは，佐渡の相川が幕府の直轄地になっていることに目を向けて，「佐渡には金山があったから，その金を守るために親藩大名や譜代大名をおいたのではないか」と，佐渡の金山を守るはたらきもあったことをとらえる姿もあった。

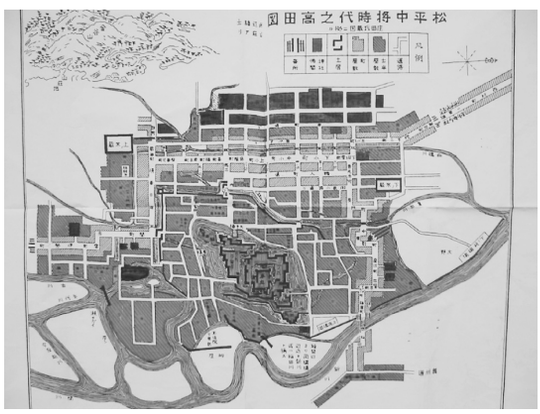
本時では，江戸幕府と高田の結びつきに着目して江戸幕府について考えをもつ姿を期待していたが，あまりにも家康の子どもが高田を治めていたということに対する印象が強く，江戸幕府の影響力の強さに目が向かなかった子供たちも多くいた。また，松平忠輝の改易の事実を知ることにより，やはり支配するための強引なやり方に強い憤りの感情をもってしまった。

よって，次時では，高田の城下町の絵図の特徴を見つけ，それをどの政策が及んでいたのか対話しながら追求する活動を通して，もう一度高田と江戸幕府との関係を多面的にとらえる姿に迫れる手立てを講じることにした。

④　５時間目

本時では，高田の城下町の町づくりについて，高田城を中心とした絵図をもとに特徴をさがし，江戸幕府の３つの政策（大名統制・身分制度・キリスト教の禁止）が高田にも及んでいたことに気付かせ，江戸幕府の政治の強固さについて評価することをねらいとした。

高田城を中心とした絵図を身分（武士・町人・寺社・農民）ごとに色分けをして特徴をつかめやすくしたことにより，子どもたちはたくさんの特徴を見つけることができた。その後，見つけた特徴が江戸幕府の３つの政策とかかわりがあるかどうか，上記の３つの観点を示したところ，子どもたちは次々と高田城の特徴と江戸幕府の政策をかかわらせて分類し始めた。



高田城を中心とした絵図

「大名支配」の観点から

・城の周りに武士が多い。

・高田城を中心に武士が集まっている。

・大名行列が通る通りには町人が多い。

「身分制度」の観点から

・武士，町人，寺社の順に，城から遠くなっている。

・町人は武士に囲まれている。　・農民が少ない。

・町屋敷の人たちは一定の場所で固めて，夜逃げができないようにしている。　・城の周りは武士が囲んでいる。

「キリスト教禁止」の観点から

・キリスト教を禁止したので，寺などが多い。・寺や神社が固まっている。

「その他・わからない・関係がない」の観点から

・川などが多く，相手の進撃を防いでいた。　・川が町を囲んでいる。

・城の周りはバランスよく守られている。

この分類の段階で，ＩさんとＫさんは，ともに「城の周りに武士が多い」という同じ気づきをしていた。しかし，二人の江戸幕府の政策との関係づけの場面で，それぞれ違う思考を働かせた。Ｉさんは，「城の周りに武士が多いのは，江戸幕府の大名支配の仕方に似ている」という考え方に対して，Ｋさんは「城の周りに武士が多いのは，江戸幕府の身分政策によるものである」という考え方をもっていた。

そこで，二人の考え方の相違に着目して，全体での話し合い場面で意見を交流する機会を設けた。Ｋさんは，「城の周りを武士，その周りを町人，そして遠くに農民がいるのは，身分制度で区切っているからだ」と，自分の考えを説明した。その意見に対して，Ｉさんは，Ｋさんの身分ごとの固まりでとらえる考え方を取り入れて，「武士が親藩大名，町人が外様大名のようにとらえると，大名支配と同じでしょう」と，江戸幕府の統制の視点から自分の考えを主張した。すると，Ｋさんは，Ｉさんの江戸幕府からの視点を受け止め，「高田の町づくりは，町人や農民にとっては厳しい身分制度でできていたなんて…」と，改めて自分の考えを多面的に問い直す姿が見られた。そして，終末の江戸幕府評価カードでは，「江戸幕府側の統制」の視点から自分の考えを構築していたＩさんが，Ｋさんの「町人や農民側の暮らし」からの観点を関わらせ，「高田の町は幕府が支配するには都合がよかったけど，町人や農民にとっては問題があったのかもしれない」という思考の深化が見られた。一方，「町人や農民側の暮らし」の視点から自分の考えを構築していたＫさんは，Ｉさんの「江戸幕府側の統制」からの観点を関わらせ，「大名配置はとてもいい考えだと思う。でも，武士と町人の身分の差はやっぱりありすぎだと感じた」という思考の深化が見られた。

ＩさんもＫさんもともに，他者の考えとの相違点に気付き，対話を繰り返す中で自分の考えを多面的に問い直し，最終的に本質をさぐりながら自分の考えを再構築するという，思考が階層的に深化する姿（思考力が高まっていく姿）が見られたと言えよう。

⑤　６時間目

「260年に及ぶ江戸幕府を築き上げた皆様へ」「2004年に生きる高田育ちの○○○○より」と題して，徳川幕府に意見文を書く活動を行った。

・江戸幕府の人たちは，自分が決めたことに責任をもっている人々でした。私も見習いたいです。
・これからはあなたがたが作ってきた高田を大切にして，守っていきたいと思います。260年，ご苦労様でした。
・（鎖国に関して）……仏教で同じことをされたらいやでしょう。せめて，仏教のいいところを話すとか，それなりのことはしたほうがよかったのでは，と私は思いました。
・（鎖国に関して）……江戸幕府のみなさんの「日本の文化をなくさない」という気持ちはわかります。でも，未来のことも少しは考えてみましたか？……（身分制度に関して）農民のことを少しでも考え，頭を使うことができていたなら，みんなから尊敬されていたかもしれませんね。
・（大名統制に関して）……私だったら，外様大名を自分の近くにおいて仲良くなるようにしようとしていたと思いますが，徳川家光様は，後のこともよく考えて配置していたんですね。

このような意見文からは，江戸幕府の政治を今の時代や自分と比べたり，関連づけたりして江戸幕府をとらえ直して評価している姿が伺える。

5　実践の成果と考察

⑴　江戸とふるさと（高田）を比べたり，関係させたりする活動

この実践で，子どもたちに，地方という小さくて身近な素材と，江戸幕府の政治という大きくグローバルな内容を対比的に関わらせ，城下町高田に迫ったり，江戸幕府との相互関係について考えたりする姿を期待し，高田の城下町の絵図を教材化し，単元を構成してきた。当然のことながら，子どもたちが日常的にふれている城下町特有の景観なども既習の知識として，思考を深める上で有効に働き理解を深めた。また，江戸幕府の政策についての知識を単に積み重ねていくのではなく，江戸幕府の強固さの要因の意味を高田の城下町と比較したり，江戸と高田の関係を明らかにしたり，また，それと自分とのかかわりなどについて考えたり，判断したりする力が見えたことから，江戸とふるさとを関わらせることは，思考過程の質的な高まりを期待することができた。

⑵　対話を核とした「調べる→考える→考えを交流する→考えを見つめ直す」思考過程

「高田城の周りに武士が多い」という社会的事象を，「大名統制との関係」という立場のＩさんと「身分制度の影響」と考えたＫさんは，対立の関係にあったととらえた。しかし，お互いに他者との関係を対話を通して切り拓いていくことで，共生の関係（共通認識する過程）へと移行する過程で，思考する姿が高まっていった。このように，自分の考えを明確にもち，意識して意見交流を行うことで，自分の考えを多面的に問い直し，もう一度自分の考えを再構成する力が育まれることが分かった。この思考過程の積み重ねこそが，社会的な思考力・判断力を高めることにつながっていくと考える。

6　今後の課題

本実践では，公民的資質を養うために必要な社会的な思考力・判断力を育成するために，ふるさとに着目した単元構成を通して，対話を核にした「調べて考える」思考過程の工夫を行った。その結果，子どもたちの社会的な思考力・判断力の質的な高まりが，単元を通して培われていったことが見えた。

しかし，単元を通して「城下町高田」を発展的に追求するような深まりを構成することができなかったので，より具体的に日常生活の中で追求できる課題の設定が必要だった。また，社会的な思考力・判断力は，知識や技能とともに実感を通し育まれていかない限り，高まっていかないことも見えてきた。相手意識を高めつつ新しい知識やそれを見つける技能を具体的・実感的にとらえることで，さらに思考が深化していくことが期待できる。

参考文献

文部省『小学校学習指導要領解説　社会編』　平成11年５月
学び続ける基礎を築く教育課程　上越教育大学附属小学校　昭和63年
頸城新風土記　石田耕吾著　昭和57年
上越のいまむかし　上越郷土研究会編　平成４年